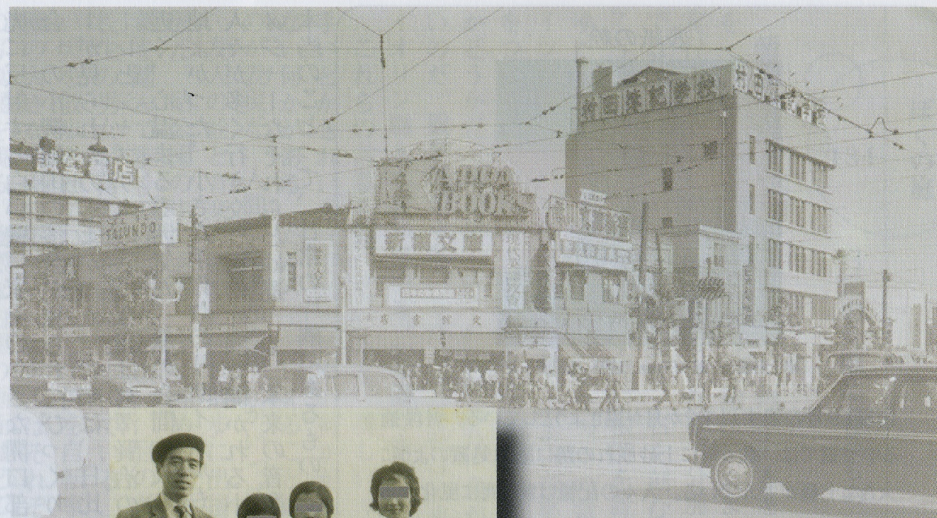


私の神保町

藤原 成暁

(建築家・ものづくり大学名誉教授)



前村教綱先生と 1963 (小4)

神田神保町は私にとって想い出深い町である。本籍地が内神田ということもあり、何かと縁がある。小学生の時はバッチ集めに、中学生は野球用具を買いに奔走し、夏は小倉アイス、冬はふくふく饅頭を頬張った。高校生になると油絵や篆刻の道具を揃えた。浪人時代は水道橋駅近くの予備校へ通った。昼食は「いもやの天井」「サブちゃんの半チャンラーメン」が定番だった。受験勉強をサボって近代美術館で過ごしたこともあった。パチンコは「アイウエオ」か「人生劇場」。チューリップは開いたものの、桜は咲かず二浪目に突入。大学入学後は岩波ホールで社会派映画に触れ、古本屋街巡りもした。

このように神保町の想い出は尽きないが、その中でもこの地での忘れられない人物がいる。ウルトラマンの画家「前村教綱」先生である。見ず知らずの私達小学生に声を掛けて下さったのが初めての出会いだった。先生は熊本から上京し修行時代を経て、下北沢の木賃アパートにお住まいだった。遊びに何うと奥様がお菓子を出して歓迎してくださった。私は

そこで先生が筆を舐めながら描くさまを息を吞んで見入った。幾筋もの墨で汚れた下唇と笑うと見える真つ黒になった口中に驚かされた。数日後その原画が「週刊少年サンデー」に掲載されて書店に並んでいる。感動が走った。ある日のこと、先生は私達を集英社見学に連れて行って下さった。帰途、千鳥ヶ淵、靖国神社を巡り、新宿の「三平食堂」でご馳走にもなった。

やがて私達は中学生になり、なんとなく疎遠になっていった。私が二十歳の頃、偶然駒沢の喫茶店で打合せ中の先生をお見かけしたことがあった。あの時のお礼をと声をかけようか迷った挙句、つい遠慮して機を逃してしまった。それが心残りで後年消息を調べたことがある。先生は還暦の歳に既に他界されていた。千載一遇のチャンスを逃してしまったことが今でも悔やまれてならない。

私の絵を描く原点は「前村教綱」という恩人との出会いにあり、先生に案内して戴いた神保町の一日は、忘れることのできない大切な想い出である。